

[先進地調査報告書①]

佐々木畜産株式会社（株式会社帯広有機）における肉用牛短期肥育・出荷月齢の早期化推進の取組み

1. 十勝地域の概況

株式会社帯広有機のある十勝地域は、恵まれた土地条件を利用したじゃがいも、てん菜、小麦、豆類を中心とした大規模な畑作地帯であるとともに、全国でも有数の大規模経営の酪農・肉用牛地帯で、酪農は牛乳・チーズなどの乳製品、肉用牛では十勝産牛肉や畜産加工品を基幹産業として展開している。

また、帯広市に隣接する音更町のホクレン十勝地区家畜市場は、令和7年4月に移転新築工事を進めていた新施設が完成し、家畜市場として日本一の規模を誇る乳牛・肉牛の取引拠点となっている。

令和9年8月には、5年に1度開催される和牛の日本一を決める「第13回和牛能力共進会北海道大会」が十勝地域で開催されることになっており、関係機関・団体が連携したPR活動が進められている。

2. 株式会社帯広有機の概要

昭和23年創業の佐々木畜産株式会社は、創業から77年目を迎えており、肉牛の生産から直売所の運営を含めた食肉の販売、家畜輸送などグループ会社4社が連携している。

4社の業務は、食肉の加工及び販売、家畜の生体販売、配合飼料・単味飼料の販売を行う「佐々木畜産株式会社（画像1）」、食肉卸、食肉加工品の製造販売を行う「やまさミート株式会社（画像2）」、家畜、食肉や飼料の輸送を行う「株式会社狩勝急行」、肉牛の育成・肥育、有機肥料の製造・販売を行う「株式会社帯広有機（画像3）」があり、十勝地域を中心とした北海道産牛肉と、自社ブランド牛などの生産から流通・販売までを担い、グループ会社で畜産を多角的に手掛けている。



画像1 佐々木畜産株式会社



画像2 やまさミート株式会社



画像3 地図上の佐々木畜産が株式会社帯広有機

株式会社帯広有機は、平成17年に農業組合法人帯広有機として乳用種の肥育からスタートし、平成30年に有限会社帯広ファームを吸収分割する形で、株式会社帯広有機に統合して現在に至っている。

株式会社帯広有機では、西帯広牧場（帯広市）及び幕別牧場（幕別町）の両牧場にて交雑種肥育を主体とした肉牛の育成、肥育を行っており、飼養頭数は両牧場で交雑種1,700頭の規模で肥育事業のみを展開している。その他には、有機肥料の製造も行っており、主に道内のホームセンターの園芸用培土の製造、農業用バーク堆肥の製造販売を行っている。

西帯広牧場では、道内市場から240日齢（8か月齢）前後で導入した交雑種（去勢のみ）を早期出荷牛として約200頭肥育するとともに、その他では交雑種の通常肥育約500頭、一部黒毛和種経産牛の再肥育や重種馬の繁殖育成なども併せて行っている。

幕別牧場では、道外の家畜市場から導入した約2か月齢前後の交雑種を育成後、肥育までの一貫生産を行うなど、一部の育成牛を西帯広牧場と相互連携しながら約1,000頭の交雑種肥育を行っている。

同社の従業員は、計10名（西帯広牧場5名、幕別牧場4名、馬1名）で部門ごとに作業分担されており、交雑種早期出荷担当は常時1名で対応している。

3. 株式会社帯広有機における早期出荷の取組み

枝肉市場における価格形成は等級が評価の基準となっており、その等級は1頭の牛からどのくらいの牛肉量が取れるのかを評価したアルファベット（歩留等級）と、脂肪交雑、肉の色沢、肉の締まり及びきめ、脂肪の色沢と質の4項目を総合的に5段階の数字で評価した肉質等級の2つの評価を表しており、枝肉市場ではこの等級が評価の基準になっていることから、現状では霜降り（サシ）の度合いが枝肉取引価格に大きく影響する以上、市場価値の高い価格帯での取引を目指すためには霜降り肉に代表される牛肉の生産が大半を占めている。

そのような中、西帯広牧場では近年の赤身肉ブームを受け、消費者とマーケットとのズレによる今後の国内市場の変化や新規開拓などを見据え、消費者が求める国産赤身牛肉を生産していくことの必要性を感じていたことが転機となり、「国産で赤身肉をキーワード」に中間層の2～3等級が不足している牛肉需要に対応することを目標に、また、同時期に干ばつや円安などの影響で外国産牛肉の価格が少しずつ高騰していたこともあり、2年前から交雑種早期出荷の取組みを開始している。

西帯広牧場の特徴的な飼養方法として、市場導入した肥育素牛を数週間環境に慣らすための慣らし牛舎（画像4）があり、一旦群飼いの経験を積んだ後に肥育牛舎（画像5）へ移動することになる。



画像4 慣らし牛舎内



画像5 交雑早期牛舎内

肥育牛舎内は、1区画当たりの面積も広く、1区画で12～13頭の多頭飼いのオールインオールアウト方式を取り入れており、牧場全体の取組みとして、給餌車による飼料給与など作業動線を考えながら飼養管理を行えるように合理的な方法を選択している。

交雑種の早期出荷の取組みを始めた頃は、出荷月齢の区分を分けて肥育試験なども行っていたが、目指していく方向性として、出荷月齢は20か月齢以内とし、出荷頭数としてはひと月に10頭以上の出荷を目標としている。

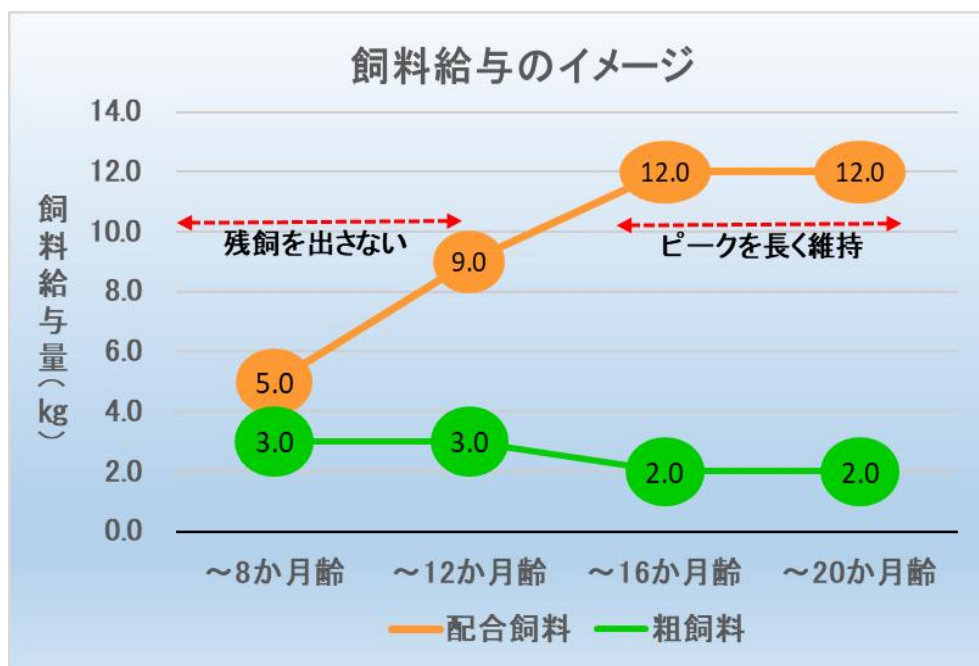
交雑種の市場評価は、脂肪交雑（サシ）よりも枝肉重量が重視されるため、肥育期間、肥育方法や飼料給与量などが異なる雌牛の早期出荷は行っていない。

肥育期間中の事故については、以前は横臥状態から起立困難となる事故なども出ていたが、成長し過ぎる前に早期で出荷することによる事故率の低減も期待されている。

4. 給与飼料の内容

肥育前期からの飼料給与については、多頭肥育などを考慮し、日々の個体観察を行いながら必要があれば増給なども行っており、全体的に肥育後期に向けて徐々に給与量を増やし、肥育後期ではピークとなる期間を長く維持するような給与法となっている。（表1）

表1 飼料給与のイメージ



早期出荷用の給与飼料については、乾牧草として北海道産チモシー（画像6）、青刈り稲のWCS（画像7）、蒸煮木質飼料（画像8）、ビール粕（画像9）及び配合飼料（画像10）を自家配合したTMR（画像11）を給与しており、その他にも地域資源などを上手く活用しながら、国産飼料の利用割合としては約30%となっている。

一般的な交雑種慣行肥育牛（去勢）の肥育終了月齢は25.8か月齢で、肥育特性にあった肥育方式を適用することが望ましいとされているが、早期出荷の取組を行う上で、導入する肥育素牛の系統や個体によって肥育期間中の発育の差も大きくなることから、株式会社帯広有機では個体差がないように何年何月生まれを合わせるようにして素牛導入を行い、月齢に応じた給与量などにより、産肉性を十分に引き出すことを目標としている。



画像6 チモシー



画像7 WCS（青刈り稲）



画像8 蒸煮木質飼料



画像9 ビール粕



画像10 配合飼料



画像11 TMR

株式会社帯広有機では、牛肉の生産から食肉の加工販売、家畜の飼料販売、直売所の運営など幅広い業務を手掛けているが、木材や伐採された街路樹などを利用し、自社で敷料として加工している。(画像１２～１３)



画像１２ 廃材置き場



画像１３ 自社製敷料

５．肥育成績

株式会社帯広有機の早期出荷牛の本格的な出荷は令和７年から始まっており、途中経過ではあるが平均出荷成績は以下の結果となっている（表３）。これから出荷頭数が増えてくれば更なるデータの蓄積・検証、飼料給与設計の見直しなどが進み、グループ内で交雑種の早期出荷に適した飼養管理プログラムとして確立されていくものと思われる。

牛肉に対する嗜好性が霜降り肉と赤身肉と二極化する中で、生産現場では赤身肉の人気の高まりを実感しながら、理想とする安定した肉質を追求し、今後も出荷頭数のペースを維持しながら交雑種の早期出荷の取組みを続けていくこととしている。

表３ 交雑種早期出荷牛の平均出荷成績

区分	出荷成績
出荷頭数	３９頭
素牛導入月齢	約８か月齢
肥育期間	１２か月
出荷月齢	１９．８か月齢
枝肉重量	４３５．２kg
ロース芯面積	４６cm ²
皮下脂肪	２．０cm

また、調査当日は直近で出荷された枝肉の検品作業を行っており、早期出荷牛肉の枝肉を見学させていただいた。(画像14～17)



画像14 枝肉の検品作業



画像15 B3、BMSNo.4の枝肉



画像16 B3、BMSNo.3の枝肉



画像17 B2、BMSNo.2の枝肉

6. 肥育牛の出荷先

株式会社帯広有機では、主たる取引先であるプリマハム株式会社とも連携しながら、東京食肉市場への出荷以外に、交雑種早期出荷牛の新たな販路拡大を目指している。交雑種慣行肥育については、自社牧場ブランド牛「十勝四季彩牛」として販売しており、肉質も追求しながら、そのブランド名には四季を通して様々な用途で使用してもらいたいという願いが込められている。また、「佐々木牛」として海外への牛肉輸出も手掛け、米国や東南アジア市場への輸出に着手し、今後も北海道産牛肉のブランド発展のため販路開拓を行っていきたいと考えている。

7. 交雑種の早期出荷による低減効果

株式会社帯広有機でも配合飼料価格や生産資材価格の高止まりを受けてコスト低減に取り組んでおり、牛舎の回転率の向上と併せ、飼料費関係はなるべく安価で増体を重視した飼料の中から選定するなどコストの低減に努め、効率的な交雑種の早期出荷に取り組んでいる（表4）。

表4 交雑種早期出荷の低減効果のイメージ

飼料費の低減効果	
交雑種早期出荷	交雑種通常肥育
8か月齢（240日齢）の素牛導入	
12か月肥育（365日）	18か月肥育（545日）
配合飼料・粗飼料代 1日1頭当たり約700円	配合飼料・粗飼料代 1日1頭当たり約700円
365日×700円 ＝255,500円／頭	545日×700円 ＝381,500円／頭
飼料費などの低減効果 126,000円／頭	

8. 今後の展望等

和牛の改良・飼養管理技術の向上でA5等級の割合が急増している中、経営を維持していくためには、高騰する飼料費などの生産コストに見合う価格が必要で、脂肪交雑を重視した枝肉取引が続く以上、上位等級を目指すのは当然のことなのかもしれない。一方で、健康志向の高まりから赤身牛肉の魅力が再評価されており、霜降り牛肉と輸入牛肉の中間層に当たる牛肉が不足している状況を受けて、時代のニーズに沿った機動的な肉用牛生産が求められてきている。

佐々木畜産グループのフットワークの軽さと思い切りの良さ、肉用牛生産に懸ける思いも感じながら、交雑赤身（グループ内での呼び名）の安定供給に繋がればブランド化も視野に入れていくことも可能だと思われる。その経験と豊かさが、今後の佐々木畜産グループ全体の物差しになっていくように感じられた。

参考資料

- (1) 佐々木畜産株式会社HP
- (2) 十勝農業協同組合連合会HP
- (3) 家畜改良増殖目標（令和7年4月 農林水産省）

（一般社団法人全国肉用牛振興基金協会）